

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2020. 1
第 93 号

蝦夷地における豊かな産物

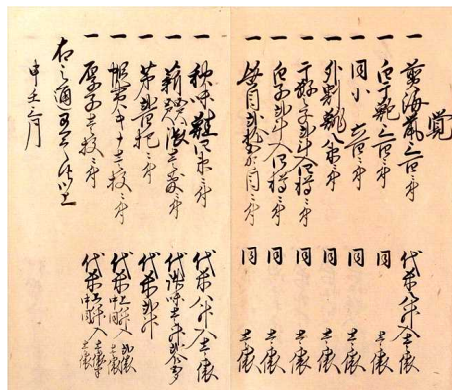
～秋田藩との買入置値段段書から～

新年が明け、テレビでは恒例のように帰省客や旅行客のニュースが流れますが、昨年の旅行してみたい都道府県ランキング（ブランド総合研究所調べ）で1位は11年連続トップの北海道。雄大な自然や、海産物などのグルメが目当てで人気のようです。ところで、北海道と秋田のつながりは対外情勢が変動する江戸時代後半から増えてきます。秋田藩の海防に関しては、過去の古文書倶楽部（9号、12号、44号）や平成18年度企画展などで詳細を紹介しておりますので、今回は別の視点から北海道（蝦夷地）とのつながりを探ってみたいと思います。

安政六年（一八五九）に幕府から命ぜられた内容は「東西蝦夷地御六家江御引渡ニ付公儀より向々江御達之手続之写」（AH三二一九七）によると、領地としてマシケ（増毛）、レフンシリ（礼文島）、リイシリ（利尻島）、ソウヤ（宗谷）紋別境の枝幸までを含む）が、警衛地としてはハツカイ（抜海）からノツシヤフ岬（野寒布岬）までが割り当てられています。

各場所での買入品の値段についての資料も残されており、図1で示した「マシケ場所産物并

新年あけましておめでとうございます。
本年も、公文書館および古文書倶楽部を
どうぞよろしくお願いいたします。



＜図1＞
「マシケ場所産物并諸品土人より買入置値段段書」
（県B-512）

諸品土人より買入置値段段書」（県B-512）などがその例です。レフンシリ・リイシリおよびソウヤの各場所でも同様の資料があり、図2はそれらに記載されている品名の一覧です。図2のNo.1～13は海産物である鮭や鱈、鰯、および加工品が見られます。No.14～32では薪や茅、厚子と呼ばれる織物、蝦夷キナという筵、多様な蝦夷細工等がみられ、No.33以降には狩猟で得られる獣皮類や万能薬として珍重された熊膽（熊胆）などの軽物もあり、多種多様な品目の取り引きがあったことがわかります。

余談ですが、熊膽に関しては、「色々合冊之部」（AS三二二六―二）の中で、文化十二年（一八一五）老中土井大炊頭（利厚）からの命により佐竹義厚が上納した記録も残っており、

全国的にも重宝されていたことがわかりますし、前述の値段段書では「代米八升入」で「十一～十五俵」で取り引きされていますので、かなり高級品であったこともわかります。旧阿仁町では戦後間もない頃まで薬売りが多くいたことを考えると、市販の医薬品が増加する近年まで貴重な品として扱われていたのでしょう。

＜図2＞

＜産物・諸品＞

No.	品名
1	鮭
2	白子
3	煎海鼠
4	干鮑
5	干数の子
6	干魚の子
7	干鱈
8	身欠鮭
9	外割鮭
10	筒鮭
11	笹目
12	鮭の粕
13	鮭油
14	茅
15	薪
16	厚子(アツ)

＜軽物・小皮類＞

No.	品名
33	熊膽
34	熊皮
35	獺(カカリ)皮
36	貂(フ)皮
37	狐皮
38	水豹(アツ)皮
39	蝶紋(フヨウ)

＜下記資料から作成＞

「マシケ場所産物并諸品土人より買入置値段段書」（県B-512）
「リイシリ・レフンシリ産物并諸品土人より買入置値段段書」（県B-515）
「ソウヤ場所産物并諸品土人より買入置値段段書」（県B-525）
「マシケ場所軽物并小皮類土人より買入置値段段書」（県B-513）
「ソウヤ場所軽物并小皮類土人より買入置値段段書」（県B-524）

話を戻して、図1の写真の一品目をご覧ください。「一煎海鼠三百二付 代米八升入壹俵」と記載されています。米一俵は三斗から五斗が一般的ですが、それが米一俵が八升になつており、他藩の資料でも同様の基準が見られます。この数字をみると、蝦夷地と各藩との交易の姿勢が垣間見れるのではないのでしょうか。

いずれにしても、当時の蝦夷地には豊富な産物があったことは間違いなく、雄大な自然とともに多くの魅力がある地であることが現在も人気がある理由でしょう。秋田県も多くの魅力を発信して活気づけていきましょう。【一関修二】

佐竹義宣は石田三成を救ったか？

「慶長四年の「義宣家譜」から」

慶長三年（一五九八）八月十八日に秀吉が伏見城で没すると、朝鮮出兵以来対立していた加藤清正らの武断派と石田三成らの文治派の抗争が一気に表面化し、翌年に武断派の諸将が大坂城の石田三成を襲撃するという事件が発生しました。

司馬遼太郎の『関ヶ原』という小説の中に、家康と本多正信が会話している場面があります。

「三成めは、よく逃げおおせたな」

「思わぬ護衛がいたのでございます」

「思わぬ護衛とは」

「佐竹義宣でございます」

三成の有力な友人である。

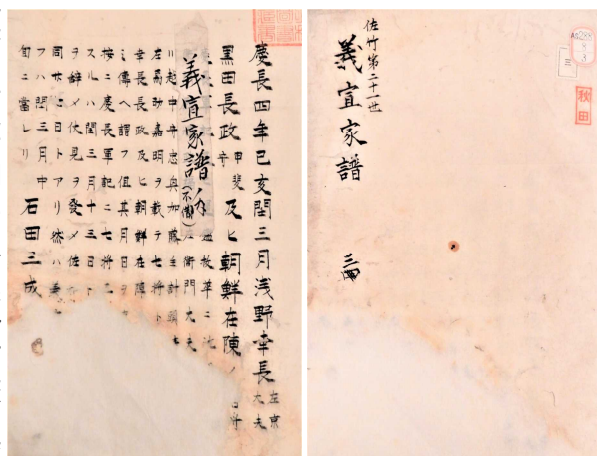
つまり、この窮地を救ったのが佐竹義宣でした。果たしてこの事件の史料的根拠は何なのか。

この時期のことは知ることができる当館の史料に、「義宣家譜」（A S 二八八—八—三）「佐竹第二十一世義宣家譜」があります。いわゆる「佐竹家譜」は、元禄時代に岡本元朝が中心になって、その編纂が行われました。（実質の編纂者は中村光得と考えられます。）厳密に言うところ「佐竹家譜」というのは、後世史料群をまとめて名付けた呼称で、当主ごとに諱をつけた（「当主名」家譜）というのが本来の史料名です。

全体としては初代義光から三十代義厚までの全六十巻となっています。しかし当館所蔵の「義

宣家譜」は十二巻のうち六巻しか現存しておらず、しかも焼損部分があります。十二巻すべての写本が東大史料編纂所にあり、平成元年に東洋書院から刊行された『佐竹家譜』（原武男校訂）は、東大本をもとに翻刻されており、当館史料の欠損部分を補うことができます。

では、翻刻された『佐竹家譜』から、慶長四年閏三月条の記述を見てみます。



「佐竹第二十一世 義宣家譜 三」（A S 288-8-3）

慶長四年己亥閏三月、浅野幸長、黒田長政及び朝鮮在陣の諸将、石田三成と不和、党を結で、三成が旧悪を挙て前田利長卿に訴ふ。利長卿喪に居て果さず。此に於て諸将兵を發して是を殺さんとす。三成殆ど危し。義宣伏見に在て是を聞て東義久をして先づ往しむ。相馬義胤其席に在て往んと謂ふ。諾、義久と同行しむ。既にして義宣自ら大坂に赴き、三成をして乗輿せし

め、自ら騎乗して伏見に帰る。諸将、三成を追て伏見に至り、内府に訴へて三成を誅せんと請ふ。内府是を許さず。諸将に諭して曰く、太閤の喪未だ期年にだも及ばず。況や幼君の時に至て私の恨を以て漫に干戈を起し、天下を騒動せしむべからず。急やかに兵を退くべしと。且つ三成に謂て曰く、諸将の鬱憤皆卿に起る。暫く職を辞して、退て佐和山に蟄居すべし。（後略）

以上の話の根拠は「古老の説に出づ」と表記されています。秋田領内や常陸での史料収集により、家譜が編纂されましたが、それらの情報の中で、内府（家康）と三成の関わりが記されています。

司馬遼太郎は膨大な史料の収集家として知られ、自宅である大阪の記念館には、何万冊という本が並んでいます。司馬が「義宣家譜」を読んでいたかはわかりませんが、小説とはいえ細かな史料にまで目を通していたのでしょうか。（「義宣家譜」では参考史料として他に「慶長軍記」「太閤記」「秀吉家譜」などが挙げられています。）

古老の伝とはいえ、関ヶ原の戦から百年程後に収集した情報の中にあるのは、同時代ではありませんが、かなり信憑性のある話といえるのではないのでしょうか。

こうして、家康と三成の対立は決定的となり、翌年の関ヶ原の戦へと向かっていきます。そして、義宣と三成の関係は、関ヶ原の戦における関東での義宣の動きへの伏線となっていく、その後の秋田移封へとつながっていくのでした。